

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

テキストに厚みを取り戻す

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009048

テキストに厚みを取り戻す

齋藤 晃

1 テキスト純化の歴史

「テキスト」という言葉がラテン語の「テクセレ *texere*」、すなわち「織る」という動詞に由来していることは、よく知られている。このラテン語の動詞は、織物を織ることはもちろん、かごを編んだり、花輪を作ったり、ひいては船のような複雑な建造物を組み立てることも意味していたという (Oxford Latin Dictionary 1996: 1934)。してみると、テキストという言葉はもともと、きわめて即物的なニュアンスを帯びていたことになる。ここ数十年ほどの人文諸科学におけるこの言葉の用法になじんでいる者にとって、この事実はずいぶん皮肉に思われる。というのも、そこではこの言葉は、およそ物質的なものとは縁の遠い使われ方をしてきたのだから。

テキストという言葉は、その語源であるテクセレが帯びていた厚みや手ざわりを、いつごろ失ったのだろうか。いやそもそも、今日のわれわれがテキストという言葉に結びつける観念、すなわち、実体的というより理念的な文字記号の連なりの観念は、いつごろ、いかにして成立したのだろうか。ここでいう理念的なテキストとは、多様な支持体やレイアウト、書体を貫いて意味論的同一性を維持するテキストのことである。規格化された書物が大量に出まわる現代社会に生きるわれわれは、そういう考え方になじんでいるはずである。このプラトン主義的なテキスト概念が、大昔の文字の発明にまでさかのぼる、とは考えにくい。また、ポスト構造主義者が「テキスト性 *textuality*」につい

て語り始めて以降のもの、というのも、ほんとうらしくない。テキスト概念の近年の流行にもかかわらず、その歴史はまだ十分に解明されていないのではなからうか。

カルロ・ギンズブルグは、「徴候——推論的範例の根源」のなかで、「テキスト純化の歴史過程」なるものを描いている（ギンズブルグ 一九八八・一九九一・二〇〇四）。「推論的範例」とは、ささいな手がかりに注目することで、直接には把握できない事柄をその個別性において認識する方法である。それは太古の昔から、獲物の足跡や排泄物を調べる狩人が実践していた方法でもある。ギンズブルグによれば、文字は出現当初、そうした手がかりとして推論的読解の対象となっていた。そのことは、たとえば古代メソポタミアにおいて、占い師が森羅万象を神が書いた文字とみなし、読み解こうとしたことから推察される。自然界に対するこのような姿勢から、「自然という書物」という西欧ではおなじみの比喩が生まれたのである。

一六世紀以降、ガリレイの物理学の登場を皮切りに近代的自然科学が発達するが、それを支えた「科学的範例」は、事物の個別的側面を切り捨て、反復可能、数量化可能な側面のみを抽出する新たな認識方法だった。それに対して、あくまで個別性にこだわる人間科学は、一六世紀以降もおおむね推論的でありつづけたが、なかには科学的範例を採用する分野もあった。そのひとつが、テキストの反復可能な部分のみを考慮することで、テキスト・クリティックへ発展を遂げた文献学である。この変化はグーテンベルクの発明と関連していた。すでに文字の発明により、「朗唱及び仕種に関する要素」を捨象していたテキストは、活版印刷の発明により「筆記形態」をも手放したのである。「この二重の操作の結果として、テキストは感覚でとらえうるあらゆる要素を除去され、徐々に物質的性格を失うことになった」（ギンズブルグ 一九八八・一九七）。「テキスト・クリティックはある決然たる決意のもとに、テキストのもつ再現可能な部分（初めは手写で可能な部分、グーテンベルク以降は機械的に可能な部分）だけを考慮するようになり、そのおかげで「厳密に科学的な方向に発展する可能性を持つようにな」ったのである（同書・一九七）。

他方、抽象化されたテキストから排除された個別的側面、とりわけ「筆記形態」は、書き手の性格を推し量る筆跡鑑定士や、古文書の年代を判定する文書館員により、推論的読解の対象として救い上げられた。もっとも、後者の方

法は一七世紀後半、ジャン・マビヨンにより古文書学へと体系化されることになるのだが。

以上、ギンズブルグの描くテキスト純化の歴史を概観してみた。彼の記述は大きっぱなものであり、個々の事実やそれらの相互関連が彼の言うとおりに進展したかどうか、疑問の余地がある。しかし、議論の前提になっている次のふたつの点は、重要ではないかと思われる。

- (1) 今日われわれがなじんでいるテキストの概念は、究明され、記述されるべきひとつの歴史をもつ。それは、書かれたものの本質的なありようではない。しかし、それはまた、形式主義者の幻想といった単純なものでもない。
- (2) われわれのテキスト概念は、特定の物質的形態を備えたテキストにわれわれが接するあり方と密接に関連している。それゆえ、この概念の歴史を描くためには、文字や印刷など、技術的・技法的要因を考慮に入れる必要がある。

ここでギンズブルグの仮説を紹介したのは、「テキスト純化の歴史過程」に今日のわれわれがいまだ巻きこまれていくように、筆者には思われるからである。周知のように、ここ数十年來、ポスト構造主義のテキスト概念が人文諸科学を席卷している。この概念は一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけて、フランスの文学者や哲学者が作り出したものである。そのひとりロラン・バルトは、一連の論考のなかで、当時起きつつあった「作品 *œuvre*」から「テキスト *texte*」への「認識論的地すべり」について語っている。すなわち、「作品は物質の断片であって（たとえばある図書館の）書物の空間の一部を占める」のに対し、テキストは「構造化され閉止を知らない言語活動そのものの無限の広がり」のなかに拡散している（バルト一九七九・五七、九三）。「作品は一個の記号内容によって閉じられる」のに対し、テキストは「記号内容を無限に後退させ」る「記号表現の場である」（同書・九五―九六）。作品は一元的であるのに対し、テキストは複数的であり、「無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」（同書・八五―八六）。作品はその起源として作者をもつのに対し、テキストは「その内部のあらゆるレベルから作者が姿を消すように作られ、読まれる」（同書・八四）、云々。

バルトのテキスト概念は、ギンズブルグが描いたテキスト純化の歴史の終着点のようにみえる。バルトのテキスト

は、「朗唱及び仕種に関する要素」や「筆記形態」はもちろん、支持体をそぎ落とされ、記号内容さえも延期されて、記号表現の限界のない戯れと化している。

ポスト構造主義のテキスト概念は、文字記号の連なりといった特定の対象を指すのみならず、どんな対象でもテキストとして読むことを可能にする方法という特徴をもつ。それゆえこの概念は、文学者や哲学者のみならず、文化人類学者、社会学者、歴史学者、地理学者などの知的道具箱にも収まるようになったのである。しかし今日では、われわれはこの概念の負の側面にも敏感になっているのではなからうか。テキスト性の概念は、われわれに多くを与えることと約束しながら、実際には多くを奪ってしまったと考える人は、少なくないのではないか。われわれが失ったもの、あるいは失ったと想像しているものは、たとえば、文学作品を通して作者の意図を理解すること、史料から過去の出來事を再構成すること、異文化を客観的に記述することなどである。

本論では、テキスト性の概念も含めて、抽象的なテキスト概念を学問上の公準とすることの是非を問うてみたい。つまり、多様な物質的形態を貫いて同一のテキストが反復されることを自明の前提として議論を展開することは是非を問いたいのである。もちろん、抽象化の効用それ自体を否定する意図はない。抽象化は科学的発展の推進力であり、実際、抽象的なテキスト概念は人文諸科学の発展にたしかに貢献している。しかし、抽象化の概念はその使用者にそれが抽象であることを忘れさせる特質があり、そのことがしばしば問題を引き起こす。

筆者の考えでは、抽象的なテキスト概念のいちばんの問題は、それが歴史的なものだという点にある。事がギンズブルグの言うとおりに進展したかどうかは、ここでは重要ではない。重要なのは、今日われわれがテキストと呼ぶ理念的存在が、ある歴史的過程を経て成立したものだ、ということである。このことは、もしわれわれがその存在を自明の前提としてしまえば、それがそもそも存在するにいたった歴史がみえなくなってしまうことを意味する。その歴史とは、われわれの知的祖先が物質的形態を備えたテキストと格闘してきた歴史にはかならない。すなわち、人間が文字を考案し、支持体を開発し、レイアウトを工夫してきた歴史であり、テキストの利用法を多様化し、その生産と流通のシステムを整備し、保管と継承の体制を構築してきた歴史である。

本論のタイトルにある「テキストに厚みを取り戻す」とは、テキストが常に物質的形態を帯びてわれわれの前に現れることを再認識することであり、にもかかわらず、われわれが理念的なテキスト概念をすんなり受け入れているのはなぜかを問うことでもある。それはまた、学問上の公準と化したテキスト概念が覆い隠してしまった、人間とテキストの取っ組み合いの歴史を掘り起こすことであり、校訂版化される以前のほこりまみれのテキストを探し出し、綿密に調べることもある。そのような努力を通じて、われわれは、自分がいま何気なく歩いている道が、実は自分に先行する大勢の人びとによって踏み固められていたことを、よりよく認識できるだろう。

2 テキストの意味論的自律

抽象的なテキスト概念を学問上の公準にするとか、テキストに厚みを取り戻すとかいうことが、具体的にどういうことを示すため、ここではポール・リクールのテキスト論を取り上げて、批判的に検討してみたい。この知的作業にとつて、リクールはうってつけである。というのも、リクールの解釈学、少なくとも一九七〇年代前半のそれは、「テキストの意味論的自律」なるものを前提としているのだから。これは、ギンズブルグが粗描した、テキストが物質性を濾過され、純化されていく歴史的過程を、非歴史的定理として言い換えたものである。実際、リクールのテキスト論の中核には、書くことは言葉の精神性を高める、という主張がある。

以下では、言葉は書かれることで出来事から意味へ止揚する、というリクールの議論を順を追って辿りながら、それを逐一反転することを試みたい。つまり、リクールが言葉の精神世界への飛翔をみ出すところで、その物質世界への転落を確認したい。そうすることで、リクールが解釈学の公準としたテキストの意味論的自律が、言葉が書かれることで一挙に達成される奇跡ではなく、人間が物質世界のただなかでひとつひとつ勝ち得た、敗北と裏腹の技術的勝利にはかならないことを示したいと思う。

リクールはまず「言語 language」と「言述 discours」を区別し、解釈学を後者のレベルに位置づけることから出発す

る。この区別はもちろん、ソシュールによる「ラング langue」と「パロール parole」の区別をふまえたものである。周知のとおり、ソシュールの言語学は共時的、体系的、社会的、無意識的な構造としてのラングを、通時的、個別的、個人的、意識的な出来事としてのパロールよりも優先させた（ソシュール 一九七二）。それに対して、リクールの解釈学は、両者の関係を逆転させ、顕在的なパロールを潜在的なラングよりも優先させるのである。なお、リクールは「『ラング』の科学の残余に過ぎない」（リクール 一九九三・二四）パロールの代わりに言述という用語を用いるので、本論もそれに従う。

構造としての言語に対して、出来事として言述は次の四つの特徴をもつ。

(1) 言語は時間のそとにあるが、「言述は時間的出来事として顕在的にそのつど実現される」（リクール 一九八五・四八）。

(2) 言語はいかなる主体もたないが、言述は話す主体をもつ。

(3) 言語はいかなる指示対象もたないが、「言述はつねに、あることについて述べる」（同書・四八）。

(4) 言語は受取り手をもたないが、言述は話しかけられる相手、すなわち対話者をもつ。

出来事としての言述は、しかしながら、実現されると同時にその出来事性を超越する、とリクールは主張する。何に向かつて超越するのか。意味に向かつて、というのが彼の答えである。「いかなる言述も出来事として実現される——しかしいかなる言述も意味として了解される。われわれが了解しようとするのは、一瞬に過ぎ去るものとしての出来事ではなくて、持続するものとしての意味である」（リクール 一九八五・四九）。言述のこの特性を、リクールは「出来事の意味への止揚」と呼ぶ。この弁証法は、発話でも萌芽的に存在するが、発話が書き記され、テキスト化されることで完全に成就する。

それでは、書くことは言述をどう変えるというのだろうか。リクールから引用すると、

書くことが固定するものは、いったい何だろうか。言うという出来事ではなく、言うことの「言われるもの」で

ある。言うことの「言われるもの」とは、言述の目的である意図の外在化を意味する。この外在化のおかげで、sagen——言うこと——が Aus-sage に、言表行為が言表になるのである。つまり、われわれが書くもの、刻印するものは、言うことのノエマ「志向対象」であり、話すという出来事の意味なのであって、出来事としての出来事ではない。(Ricoeur 1971a: 180; Ricoeur 1971c: 532)

リクールが解釈学の公準としたテキストの意味論的自律とは、この「言われるもの」の言うことからの自律を指す。リクールによれば、両者の隔たりはすでに発話のなかで生じている。つまり、言うことは時間的・空間的に局在化した唯一無二の出来事だが、言われるものは反復可能なのである。たとえば、わたしがあなたに「ドアを閉めて下さい」と言う場合、この「ドアを閉めて下さい」は繰り返し言うことができるし、同じ言われるものとして認識され、再認識される。もともと、発話では、言われるものは言うことのみでしか実現されず、それゆえ両者は未分化である。それに対して、書くことは言われるものから分離し、前者の自律を完全に成就させるのである。

このように、書かれることで言うことは言われるものへ、言述の出来事はその意味へ止揚するわけだが、それにもない言述の出来事性を構成する先の四つの特徴はいったん否定される。そして、「テキストの誕生」(Ricoeur 1971b: 137)を画する新たな四つの特徴が成立する。

(1) 発話では、言述は時間のなかにあり、「瞬時に消えることば」(リクール 一九八五・五一)の域を出ない。しかし、テキストでは、言述は刻印され、固定され、保持される。

(2) 発話では、言述の意味は話す主体の意図と重なり合う。しかし、テキストでは、それは書く主体の意図から自律する。「テキストの言うところは、いまや著者が意味しようとした(言わんとした)ところ以上に重要」(リクール 一九八五・五二)となり、後者は前者から推測されるにすぎなくなる。

(3) 発話では、言述が指示するのは「対話者どうしに共通な状況」(リクール 一九八五・五三)であり、「言述の状況によって決定される『ここ』と『いま』である」(同書: 一九一)。しかし、「テキストはその指示を、公然たる

指示という限界から解放」(同書・五四)し、非公然たる指示によって可能的な世界を構築する。

(4) 発話では、言述は「二人称の汝にだけ差しむけられる」(リクール 一九八五・五五)。しかし、「テキストは読める者には誰に対しても開かれて」(同書・六〇)。

こうして、テキストの意味論的自律が完成する。テキストは「いま」と「ここ」という個別的状況を超越し、特定の書き手と特定の読み手から解放されて、リクールが「テキスト世界」と呼ぶ独自の世界を展開するようになる。「テキスト世界」とは、「テキストによって開かれた指示の全体」、「可能的な存在様式として、われわれの世界内在の象徴的な次元として提供される、非状況的な指示」の全体である(リクール 一九八五・五四)。そして、解釈学の目的は、書き手の意図の探求から、この「テキスト世界」の探求へと振り向けられるのである。

テキストと発話、世界と状況のあいだにリクールが設定した二律背反は、エドワード・W・サイードにより厳しく批判されることになった(サイード 一九九五・五三―五六)。リクールの解釈学では、テキストと状況がふたりに「椅子取りゲーム」を繰り返しているようだと、サイードは皮肉っている。サイードの考えでは、発話と同様、テキストも状況のなかにあり、状況をそのなかに含んでいる。「テキストとは世界内的なものであり、テキストはある程度は事件であるのであり、テキスト自体がそれを否定するように見えるときですら、テキストは社会的な世界、人間生活の一部なのであり、むしろ、テキストが位置づけられ解釈を受ける歴史的瞬間の一部でもある」(同書・六)。

リクールとサイードが、ハイデガールの「世界内存在 *in-der-Welt-sein*」という言葉を対称的な意味で用いていることは、興味深い。サイードにとって、「世界内存在」とは「情况的現実」を指し、リクールにとって、それは「テキスト世界」を指している。リクールによれば、サイードの「情况的現実」は、そもそも「世界 *Welt*」の名に値しない「環境 *Umwelt*」にすぎない。それは話し手と聞き手のみが共有する個別的状況であり、テキストの強みはそこからわれわれを解放してくれることなのである。他方、サイードによれば、リクールの「テキスト世界」、すなわち「われわれが読み、了解し、愛するであらうあらゆるテキストの非公然たる指示によって投企された《世界》」(リクール一九八五・五四)は、その指示の非公然性ゆえ、オリエンタリズムの悪夢に転化しうる。実際、オリエンタリス

トたちが読み、了解し、愛するオリエント世界は、『オリエント』として実在する事物のごとくを排除し、駆逐し、邪魔物扱いにすることによってこそ、読者に対してひとつの現前となるのである」(サイド 一九八六:二二)。

3 意味から出来事へ

議論の出発点に戻って、問題を整理してみよう。前述のように、リクールは、書くことから言われるものを、言述の出来事からその意味を切り離し、自律させる、と主張する。書くことによる「言述の意味論的自律」(リクール 一九八五:二三)は、解釈学の目的を書き手の意図の探求からテキストの意味の探求へ振り向け、解釈学を心理主義から解放するうえで、決定的に重要である。しかし、テキストが言述を固定し、発話状況から切り離すとしても、切り離された言述が意味論的に自律することの保証がいったいどこにあるのだろうか。誰もが知っているように、発話を逐語的に書き記しても、意味は保持されない。なぜなら、発話の意味は、文字で固定できる語彙的・統語的要素だけでなく、話し手の表情や身ぶり、声の抑揚や強勢、さらには、対話者の関係や対話の時間や場所など、われわれが「コンテキスト」と総称する諸要素に依拠しているのだから。リクール自身、この事実を無視しているわけではない。彼は書くことが言うことの何を固定するかについて、J・L・オースティンの言語行為論にもとづいて議論している(リクール 一九八五:一八〇—一八二;リクール 一九九三:三四—四二;Ricoeur 1971c: 532-534)。

周知のように、オースティンは言うという出来事を相互に関連した三つの行為に分割した。すなわち、「発語行為 locutionary act」と「発語内行為 illocutionary act」と「発語遂行行為 perlocutionary act」である(オースティン 一九七八)。たとえば、わたしがあなたに「ドアを閉めて下さい」と言う場合、わたしがそう言うことが発語行為、わたしがあなたに依頼(催促、命令など)することが発語内行為、わたしがあなたにドアを閉めさせることが発語遂行行為に相当する。リクールによれば、書くことが固定するのは発語行為、および発語内行為の一部である。発語行為が記述可能なのは、「ドアを閉めて下さい」という文が、話されようが書かれようが、同一の文として認識され、再認

識されることから理解される。他方、発語内行為、つまり言うことのうちに何か（報告、予想、約束、説得、詰問、警告など）をする行為は、話し手の声の韻律やコンテキストに依拠するゆえ、記述されにくい。とはいえ、発語内行為にも「時制やコード化された副詞的表現」、「文法上の法の使用」などの「言語的標識」があり、そのかぎりではそれは記述可能である（リクール一九九三：四〇―四一）。最後に、発語遂行行為はテキストから完全に欠落するが、これはそもそも、発語遂行行為が言うことのうちというより、そこにあるからである。発語遂行行為は意味作用に関与しないのだ。

しかし、発語内行為は意味作用に関与しており、それゆえ発語が書かれることで、発語内行為が部分的にせよ損なわれるならば、テキストの意味作用に欠損が生じざるをえない。この問題はどうか解決されるのだろうか。リクールはこう続ける。

書き言葉の場合には、以上のような話し言葉の言語的標識が保持されるばかりか、さらに補助的な弁別記号として、話者が執筆者に変わるとき消滅する顔つきや身振りによる表現を示すため、引用符、感嘆符、および、疑問符などが加わる。（リクール 一九九三：四一）

このリクールの言葉は、言述における出来事の意味への止揚と彼が呼ぶものを、解釈学的必然から歴史的偶然に変えてしまっている。というのも、引用符や感嘆符、疑問符は、文字の発明とセットになって人間に与えられるものではないのだから。西欧の句読法についてのM・B・パークスの研究によれば、疑問符は八世紀後半、キリスト教の典礼式文の朗読を補佐するため導入され、感嘆符は一四世紀後半、人文主義者による古代の弁論術の復興とともに導入された（Partes 1993: 35-36, 40）。他方、引用符の起源は古代にまでさかのぼる。テキストの重要な箇所を読み手の注意を喚起する欄外記号が、中世になると聖書からの引用を示すため使われ、近代以降、印刷物の印字幅に入りこんで、引用文一般を指すようになったのである（Partes 1993: 57-61）。いずれにしろ、重要なのは、発語内行為を記述可能

にする「補助的な弁別記号」は、書くこと一般の属性ではなく、明瞭に書こうとする人間の創意工夫が生み出したものだ、ということである。テキストの意味論的自律がそうした創意工夫に依存している以上、それは解釈学上の真理ではなく、人間の努力次第で近似値的に実現したりしなかったりする歴史の出来事ということになる。

この歴史の出来事については、デヴィッド・R・オルソンが、思考と認知に対する読み書きの影響という観点から、明瞭な見取り図を描いている (Olson 1994)。オルソンは、リクルールがつまずいたところ、すなわち、聞き手に懇願し、奨励し、要求する「発語内的力 illocutionary force」が、言述が書かれることで損なわれる、という認識から出発する。声音や表情、身ぶりなど、話し手が発語内的力を行使するやり方の一部が、書き手には利用できなくなるわけだが、オルソンの狙いは、この読み書きの弱みが実はその強みの源であることを示すことにある。オルソンによれば、われわれはテキストから失われた発語内的力をふたたびテキストに戻してやるため、語彙的・統語的手段を洗練させ、視覚的な補助記号を考案し、書式を標準化し、装丁に工夫を凝らした。そのおかげで、われわれは書くことを通じて発語内的力をより十全に行使できるようになったうえ、その力を明瞭に意識化し、統御できるようにさえなった。他方、テキスト自体は、発語行為のみならず発語内行為も明示できるようになり、記憶の補助から「意味の自律的表象」(Olson 1994: 187) へと発展していくのである。

失われた発語内的力をテキストに戻してやるため人間が考案した仕組みとして、オルソンが指摘するものは、いずれも本格的な歴史学的探求に値すると思われる。たとえば、書式である。オルソンが例にあげるのは法律文書だが、それらは歴史上、比較的早い時期に、命令、請願、訴訟などの発語内行為に応じて書き方が定式化された。当然、文書の解釈も標準化され、そのおかげで法律文書は、唯一にして字義どおりの意味をもつテキストとして、書き手の意図に取って代わるにいたった (Olson 1994: 187-188)。もうひとつの重要な仕組みは、オルソンが「言語行為動詞 speech act verb」と「心的状態動詞 mental state verb」と呼ぶものである。それらの動詞はそれぞれ「言う say」と「考える think」の発展型と考えるとわかりやすい。それらは話し言葉にも備わっており、他人の発言を引用し、それがどのような意図でなされたかを明示するのに使われる。しかし、それらの動詞が高度に発達するのは、やはり人

表1 言語行為動詞と心的状態動詞のいくつかについて、英語での最初の使用が知られている時期 (Olson 1994: 109 をもとに筆者が作成)

ゲルマン語系		ラテン語系	
believe	古英語	assert	1604年
know	古英語	assume	1436年
mean	古英語	claim	中英語
say	古英語	concede	1632年
tell	古英語	conclude	中英語
think	古英語	confirm	中英語
understand	初期中英語	contradict	1570年
		criticize	1649年
		declare	中英語
		define	中英語
		deny	中英語
		discover	中英語
		doubt	中英語
		explain	1513年
		hypothesize	1596年 (ギリシヤ語系)
		imply	中英語
		infer	1526年
		interpret	中英語
		observe	後期中英語
		predict	1546年
		prove	中英語
		remember	中英語
		suggest	1526年

注：古英語は1150年以前、初期中英語は1150年から1350年、後期中英語は1350年から1450年の英語を意味する。

出典：The Oxford English Dictionary

間とテクストの関係が緊密化して以降のことと推察される。オルソンの研究によれば、一六世紀から一七世紀にかけて、英語の話者はラテン語の語彙を大量に借用したが、そこには相当数の言語行為動詞と心的状態動詞が含まれていた (Olson 1994: 108-109) (表1)。

この事実の意義を究明することは、たいへん興味深い。最後に、発語内の力を明示する視覚的な仕組みの重要性を指摘したい。具体的に、書体、句読点や疑問符、引用符などの補助記号、分かち書き、行や段落の配置を含めたレイアウトなどである (Olson 1994: 110)。

リクールのいわゆる「テクストの誕生」を歴史的に相対化したいま、そのテクストの特徴として彼があげる四つの点を歴史化することは、容易なことである。それら

の四点は、そのまま将来の研究課題として役立ちうる。

(1) テクストが言述を固定し、保持するというのは、単なる可能性にすぎない。その可能性を実現するためには、社会的なレベルでの意志と努力が必要である。耐久性のある支持体、インク、定着方法、装丁方法の開発はもちろん、テキストの整理・保管・参照の体制を構築することも欠かせない。

(2) 発話を逐語的に書き記しただけのテキストは、不完全な意味作用しかもたず、書き手から自律しえない。つまり、書き手が解説してやらなければ意味をなさない。テキストが意味論的に自律するためには、発語内の力を明示できるよう、書式やレイアウト、語彙や統語法を改変しなければならない。そうしてはじめて、テキストは書き手の意図を十分に体現し、それに取って代わることができる。

(3) リクルール自身がみとめるように、発話が書き記され、発話状況から切り離されると、その指示作用は空回りし、「テキストはいくぶん『宙に浮く』」(Ricoeur 1971b: 138)°。この宙ぶらりんのテキストに指示対象を戻してやるのは、単なる書くことではなく、文語的に書くことである。すなわち、代名詞や指示詞、時間や場所の副詞を明示し、直接話法を間接話法に変え、関係代名詞や接続詞により節の関係を明確化したうえ、コンテキストとして了解されていることを言述化しなければならない。

(4) テクストにおける「聴衆の普遍化」(リクルール 一九九三: 六〇)は、やはりリクルール自身がみとめるように、「潜在的なものにすぎない」(同書: 六一)。言述は書かれたからといってすぐに不特定多数の読者をもつわけではない。そのためには、テキストの複製技術の発達や流通経路の整備、学校教育の普及や読み書き能力の応用先の拡大など、一連の技術的・制度的改革が必要である。

いまやリクルールのテキスト論からひとつの研究方針を引き出すことができる。その方針とは、言述における出来事の意味への止揚を反転したもの、すなわち、言述の意味からその出来事への下降、言われるものから言うことへの下降である。

リクルールが指摘するように、書かれた言述は、書き手の意図から、書記状況から、特定の受取り手から切り離すこ

とができる。しかし、リクルールの言明に反して、書くことは言述を意味論的に自律させるどころか、その意味作用を危機に陥れる。発語内の力が損なわれ、代名詞や指示詞が機能停止した結果、テキストの意味は宙に浮かざるをえない。その場合、テキストを救済するてっとり早い方法は、書き手や状況、受取り手のもとにテキストを送り返してやることである。テキストが機能障害に陥ったのは、そもそもそれが分不相応なひとり歩きを試みたからである。それゆえ、問題を解決するためには、テキストをもととの状況につなぎ止めておくのが、いちばんなのである。

しかし、宙に浮いたテキストを救う別のやり方もある。それは、テキストのひとり立ちを支援し、テキストをしてみずからを救わせることである。そのための方法が、失われた発語内の力や指示対象をテキストに戻してやるさまざまな仕組みなのである。もちろん、どれほど技巧を凝らしても、テキストの意味論的自律は完全には成就しえない。なぜなら、テキストの意味の理解に必要な情報をもれなくテキスト内部に盛りこむことは至難の業だし、かりにそれができたとしても、テキストを別の情報に照らしてそこから別の意味を引き出すことは、常に可能なことから、「ドアを閉めて下さい」という文が、いつでも誰が誰に下した命令であり、どれほどの強さの命令であり、どのドアをどう閉めさせることで何が期待されているのか、などをいくら詳しく明記したところで、解釈の多様性を排除することはできないのである。しかし、読み手の解釈を一定の方向に導くさまざまな指標を開発し、それらをテキスト内部に盛りこむことは、つねに可能である。

要するに、テキストの意味論的自律は、特定の時代、特定の地域におけるテキストへの人間の働きかけの結果、近似的的に実現したりしなかったりする出来事なのである。それは、真理でも幻想でもなく、歴史なのだ。われわれの社会では、テキストの意味論的自律を支える技術や技法、制度が比較的発達している。加えて、テキストという概念が明確に意識化され、書物や文書の分類原理として使われている。われわれにとって、同一の意味をもつ文字記号の連なりが多様な支持体やレイアウトを通じて反復的に自己実現する、という考え方は、自然である。しかし、その考え方自体、歴史の所産にほかならない。重要なのは、こうしたことが、言述の意味から出来事のレベルへ下降すること、はじめてみえてくることである。意味のレベルにとどまるかぎり、言述の歴史はみえないのである。

たしかに、言述の意味ではなく出来事のレベルに陣取することは、研究の手法としては、一種のまわり道を意味する。なぜなら、言述の出来事が完全にその場かぎりのものにとどまり、意味への止揚がまったく起こらないことは、ありえないのだから。しかし、その止揚がどの程度起こるのか、それを可能にする仕組みは何なのか、その仕組みはいつ誰が考案し、どのように普及し、どんな波及効果をもたらしたのか、などの問いに答えようとするなら、このまわり道は、ぜひとも必要である。言述の出来事からその意味へ、言うことから言われるものへそそくさと移行してしまえば、後者が前者から自律していく歴史が見失われてしまうのである。

4 物質性と主体性

言述の意味からその出来事へ下降することは、ミシェル・フーコーの言葉を借りれば、「言表 *énoncé*」から「言行為 *énonciation*」へ下降することと言い換えられる。フーコーによれば、「言表行為は、繰り返されることのない一つの出来事である。それは、他に還元できぬ、場所、日付上の独自性を有している」。他方、「言表それ自身は、言表行為のこの純粋な出来事に還元されえない。それというのも、言表は、その物質性にもかかわらず、繰り返されうるからである」(フーコー 一九八一…一五五⁴)。

『知の考古学』におけるフーコーの議論は、言われるものが自律的な領域を形づくることを前提としており、本論と交わる点は少ない。しかし、言表の物質性を論じるくだりで、フーコーは必要に迫られて言われるものから言うことへ下降しており、その議論は興味深い。「言表それ自身を構成する」とフーコーがみなす「物質性 *matériale*」とは、言表が特定の時空間に出現するとき必然的に帯びる「感性的要素」を指し、発話の音声も含んでいる(フーコー 一九八一…一五二—一五四)。少なくとも、議論の出発点では、フーコーはこの物質性を重く受け止めている。たとえば彼は、同一の文でも、それが発話されるか、手で書かれるか、印刷されるかにより、「同一の言表を構成しない」(同書：一五二—一五三)と言い切っている。

もつとも、フリーコーは言表を物質性の全面的支配下に置くことをよしとしない。そして、時間的・空間的に局在化した出来事である言表行為から、反復可能な言表へ上昇することで、前者の物質性を中和しようとする。フリーコーから引用すると、

何度も転載された一つのテキスト、一冊の書物の相つぐ諸版、いつそう適切に言えば、同一の刷りの相異なつた一冊一冊、などは、それだけの数の明確に区別された言表を生ぜしめない。すなわち、『悪の華』のすべての版において（異本や発売禁止のテキストの類いはさておくとして）見出されるのは、同一の言表の働きである。もつとも、活字、インク、紙、また、いづれにせよテキストの局在化や諸記号の場所、などはどれも同一ではない。すなわち、物質性はすべての細部にわたつて変化した。だが、ここで、これらの「小さな」差異は、言表の同一性を変質させたり、それから他の言表を立ち現わさせたりしない。すなわち、それらはすべて、「書物」の一般的要素——もちろん物質的なものだが、同時に制度的でもあれば、経済的でもある——のうちに中性化されている。発行部数や重版の数がどうであれ、使われうるさまざまに異なつた材質がいかなるものであれ、一冊の本は、言表と正確に等価的な場所であり、言表にとつて同一性を変えることのない反復の一審級である。（フリーコー 一九八一…一五六）

フリーコーは、言表が常に反復可能である、と主張しているわけではない。たとえば、「或る憲法、遺書、宗教的啓示などのテキスト」は、オリジナルとコピーでは価値が違つてくる。それゆえ、言表の物質性にまつたく意味がないわけではない。とはいえ、真に重要なのは物質性そのものではなく、「書き換えや転写の可能性」を規定する「制度の秩序」である（フリーコー 一九八一…一五七）。その「制度の秩序」が特定の言表を書き換え不可能、転写不可能と宣言するかぎり、物質性は言表の構成要素となるのである。結局、フリーコーの議論では、あらゆる言表行為が必然的に帯びる物質性は、「制度の秩序」のふるいにかけられ、若干の言表のうちに残存するにとどまる。

フーコー自身がみとめるように、「言表と正確に等価的な場所」という書物の概念は、物質的であるとともに制度的、経済的であるという理由で、歴史的でもある。「一冊の書物の相づく諸版」や「同一の刷りの相異なった一冊一冊」が異なる言表を生じさせない、という命題は、今日では作者や読者、出版業者や書籍商が規約として共有しており、一般の人びとの常識としても通用している。しかし、それはたとえば近代初期のイギリスには当てはまらない。エイドリアン・ジョーンズが『書物の本性』で論じたように、当時のイギリスでは、誤植や落丁は言うに及ばず、権利の尊重や原典の正確な転写・複製などはなから意図していない剽窃や海賊行為が横行していた (Johns 1998)。そもそも、校正が印刷と並行して行われたため、「ある版の最終的な刷り上がりをどれか二冊とつても、それらが同じであるとはかぎらない」 (Johns 1998: 91) というありさまだった。こうした状況では、「言表と正確に等価的な場所」という書物観自体がユートピアにすぎない。読者もそのことを十分心得ており、たとえ同じ書物でも、信頼の置ける版元のものとそうでないものを明確に区別していた。

ジョーンズによれば、イギリスでは一八世紀末にいたるまで、書物を含めた印刷物全般に対する人びとの態度は、信頼と不信のあいだをゆれうごいていた (Johns 1998: 389-396)。「近代初期を通じて印刷の真の本性は未決着のままだった」 (Johns 1998: 34)。この状況が変化し、印刷物への信頼が今日のように一般的になるのは、一九世紀以降のことである (Johns 1998: 628-629)。そのころには、印刷機は木製から金属製へ、人力から蒸気式へと変わり、大量の資本投下を必要とする産業に変貌した印刷業は、仕事場を家庭から工場へと移していたのである。

それでは、フーコーの命題は一九世紀前半を境にして偽から真に変わったのだろうか。事はそれほど単純ではない。実際、ジョーンズの研究が示しているのは、いかなる時代でも、書物が言表の同一性を支えるゆるぎない審級であることはない、ということである。つまり、出版業界の規約や一般の人びとの常識がどうであれ、書物の同一性には常に交渉の余地があり、実際それは交渉されるのである。一九世紀以前であろうが以後であろうが、書物の同一性は、それに利害関心をもつ人びとにより「舞台裏で」行われる骨の折れる、継続的な労働 (Johns 1998: 33) の賜物にはかならない。その労働とは、たとえば、自分の作品を自分の望むかたちで出版しようとする作者の試み、たっ

たり、商売の信用を高めようとする出版業者の試みだったり、政治的・宗教的正統性を守ろうとする官僚や聖職者の試みだったりする。そのいずれもが、剽窃や海賊行為に対抗し、諸版や刷りの一冊一冊が同一の言表でありつづけるよう、絶え間ない努力を積み重ねている。

フーコーは、書物の同一性を歴史的なものにとらえているが、それを規範的なものとしかみていない。そのことは、「異本や発売禁止のテキストの類いはさておく」という保留が示している。他方、ジョーンズは、書物の同一性が規範化することをみとめながら、その規範すら交渉されうると考えている。実際、規範を破ることで発生する不利益よりも、期待される利益のほうが大きければ、人びとは規範を破るだろう。その結果、剽窃や海賊行為が規範の裏をかいて横行するのである。

ジョーンズの立場に立てば、言表行為の物質性について、フーコーがみようとしなかったものがみえてくる。言表行為の物質性が言表の同一性のうちに完全に中和されることはありえない。中和されるべきだという規範が存在するとしても、それを遵守するかしないかを決めるのは、個々の人間なのである。他方、近代初期のイギリスのように、書物の同一性が規範として確立していない社会でも、必要とあれば人間は、書物の物質的な製造や流通の過程に介入することで、書物の同一性を構築することができる。実際それが、ロンドンの書籍商組合や王立協会がやろうとしたことなのである (Johns 1998: 187-265, 444-522)。もちろん、成功の度合いはさまざまだが。

言表行為の物質性は、言表の「書き換えや転写の可能性」に還元されるどころか、言表の同一性が作り上げられる「舞台裏」そのものである。そしてその物質性が「言表の同一性を変質させたり、それから他の言表を立ち現わさせたりしない」よう、それを「小さく抑えるのは、言表行為の主体の絶え間ない努力なのである。ところで、言表行為の物質性とその行為者の主体性というふたつの要素は、言表のレベルではなく言表行為のレベルに陣取ることで、はじめてみえてくる。それゆえ、言表から言表行為へ下降する本論の研究方針は、次のふたつの派生的方針を伴う。

(1) 多様な支持体やレイアウト、書体を貫いて意味論的同一性を維持するテキストのみならず、特定の時空間に顕在化している、物質的形態を備えたテキストも研究対象に据える必要がある。この視野の拡大により、後者の検

討を通じて前者を相対化すること、つまり、ゆるぎない同一性をもつかみえるテキストが、実は同一性障害に陥っており、それを克服するため工夫と努力が重ねられていることを示すことが可能になる。

(2) テキストにおいて言われることだけでなく、テキストにおいて、テキストに対して、テキストによってなされることにも注目すべきである。テキストを扱う人間との関係の総体において考察しなければならない。すなわち、特定の時代、特定の地域で、人間がテキストを作成し、受け渡し、読み解き、整理し、保管し、繰り返し参照し、次世代に継承し、廃棄するありさまを把握するとともに、それらの実践がテキストの意味作用にどのようなにかかわるかを解明しなければならない。

まとめよう。本論が提案する「テキストに厚みを取り戻す」という研究方針は、多様な物質的形態を通して意味論的同一性を維持するテキストの概念を相対化し、その概念が学問上の公準となることでみえなくなってしまう、テキストへの人間の働きかけの歴史を掘り起こすことを目指す。そのためには、言述の出来事が意味へ止揚する、というリクルールの弁証法を反転し、反復可能な意味ではなく個別的な出来事のレベルでテキストを考察する必要がある。すなわち、物質的形態を備えた個々のテキストを研究対象に据え、人間がそれらを作成し、受け渡し、読み解き、整理し、保管し、参照し、継承し、廃棄するありさまを究明するのである。そうした努力を通じて、われわれは、理念的なテキスト概念がいかなる歴史的条件のもとで成立し、普及し、ひいてはわれわれをしてわれわれ自身の歴史の一端を忘れさせるにいたったかを理解できるだろう。

注

(1) 「テキスト純化の歴史過程」という言葉は原注五一にある。

(2) リクルールのテキスト論は、単著であるリクルール 一九九三: Ricœur 1976のほか、以下の論文に詳しい。「説明と了解」(リクルール 一九八五: Ricœur 1986)、「言述における出来事と意味」(リクルール 一九八五: Ricœur 1971a)、「哲学と宗教言語の特殊

性」(リクール 一九八五)、「隠喩と解釈学を中心問題」(リクール 一九八五)、「解釈学の課題」(リクール 一九八五: Ricœur 1986)、「疎隔の解釈学的機能」(リクール 一九八五: Ricœur 1986)、「テクストとは何か?」(Ricœur 1971b; Ricœur 1986)、「テクストと、いう範例」(Ricœur 1971c; Ricœur 1986)。

(3) 「テクストの意味論的自律」という言葉は、リクール 一九八五: 三六: Ricœur 1976: 25, 29-31, 35; Ricœur 1986: 175 にある。書くことが言葉の精神性を高める、という主張は、リクール 一九八五: 五三—五五: リクール 一九九三: 六一、六八: Ricœur 1971c: 535-536 にみられる。

(4) フーコーの言表は、議論の出発点では、リクールの言述とさして変わらない。しかし、議論が進むにつれて、言表は「言説 discourses」と彼が呼ぶものの「形成=編制の規則」に従属し、それによって同一性を獲得することが明らかになる。リクールの言述が単独意味をもつに対し、フーコーの言表は言説の一部としてのみ意味をもつ。思想家としてのフーコーが関心を寄せるのは、文や命題そのものの意味ではなく、それらがたとえば一九世紀の精神病理学的言説のなかでもつ意味なのである。なお、ここで言表行為と言われるものは、のちに「定式化(formulation)」と言い換えられている。フーコー 一九八一: 一六二—一六三を参照せよ。

参考文献

- オースティン、ジョン・L 一九七八 『言語と行為』坂本百大訳、大修館書店。
- ギンズブルグ、カルロ 一九八八 『神話・寓意・徴候』竹山博英訳、せりか書房。
- サイード、エドワード・W 一九八六 『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社。
- 一九九五 『世界・テキスト・批評家』山形和美訳、法政大学出版社。
- ソシュール、フェルディナン・ド 一九七二 『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店。
- バルト、ロラン 一九七九 『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房。
- フーコー、ミシェル 一九八一 『知の考古学』中村雄二郎訳、河出書房新社。
- リクール、ポール 一九八五 『解釈の革新』久米博・清水誠・久重忠夫編訳、白水社。
- 一九九三 『解釈の理論——言述と意味の余剰』牧内勝訳、ヨルダン社。

- Johns, Adrian. 1998. *The Nature of the Book: Print and Knowledge in the Making*. Chicago: University of Chicago Press.
- Olson, David R. 1994. *The World on Paper: The Conceptual and Cognitive Implications of Writing and Reading*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Parke, Malcolm B. 1993. *Pause and Effect: An Introduction to the History of Punctuation in the West*. Berkeley: University of California Press.
- Ricoeur, Paul. 1971a. "Événement et sens dans le discours." In Michel Philibert, *Paul Ricoeur ou la liberté selon l'espérance*, pp. 177-187. Paris: Éditions Seghers.
- _____. 1971b. "What is a Text? Explanation and Interpretation." In David M. Rasmussen, *Mythic-Symbolic Language and Philosophical Anthropology: A Constructive Interpretation of the Thought of Paul Ricoeur*, pp. 135-150. The Hague: Martinus Nijhoff.
- _____. 1971c. "The Model of the Text: Meaningful Action Considered as a Text." *Social Research* 38(3): 529-562.
- _____. 1976. *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*. Fort Worth: The Texas Christian University Press.
- _____. 1986. *Du texte à l'action. Essais d'herméneutique II*. Paris: Éditions du Seuil.